

## 慈円と定家の句題和歌考（二）

丸山正道  
Masamichi MARUYAMA

### （一）

慈円——「詠百首和詞」、「春十五首」（六家集（和本）——拾玉四（巻第四）、十二オ）

### （3）

「白片落梅浮澗水」

雪をくゝる谷の小川に春そかし垣ねの梅のちりける物を（2015）

（校異）「小川に」——「小川は」（新編国歌大観——第三巻——私家集編Ⅰ）（略して、私家集編Ⅰ、とする。以下、同じ。）（拾玉集——1909）

白居易の漢詩の句、「白片落梅浮澗水」、は「春至」（和刻本・漢詩集成・唐詩・第九輯）（白氏長慶集（上）、巻十八、233頁）（略して、和刻本・九、とする。以下、同じ。）の一句である。

この「春至」は、

若為南国春還至	争向東樓日又長
白片落梅浮澗水	黄梢新柳出城牆
閒拈蕉葉題詩詠	悶取藤枝引酒嘗
樂事漸無身漸老	從今始擬負風光（233頁）

（註）白居易の漢詩の場合、文字は舊漢字であるが、それを新漢字に私的に改めている場合がある。以下同じ。

（校異）四句目「牆」——歌合・定数歌全釈叢書八、文集百首全釈（略して、文集全釈、とする。以下、同じ。）では、「牆」。五句目「閒」——文集全釈では、「閑」。（文集全釈、25頁参照）で、七言律詩である。韻は、「長」、「牆」「嘗」「光」に押韻されている。この詩では、1句目は、押韻ナシ。

「春至」は、日本で言えば「立春」に相当するか。律詩なので、三句目と四句目とが対、五句目と六句目とが対となっているものである。取り上げられた詩は、三句目である。

この取り上げた「春至」の詩の前後の詩は、どのような配置の詩の構成となっているか、少し見てみることにする。

除夜	
歲暮紛多思	天涯渺未歸
老添新甲子	病減舊容輝
鄉国仍留念	功名已息機
明朝四十九	應轉悟前非（232頁）

この詩は、「春至」より二つ前の詩である。五言律詩であるので、韻は、「歸」「輝」「機」「非」に押韻

されている。

「明朝四十九」とあるので、「歳暮」は前の年で、四十八歳。そして、年が明けて「四十九」歳、ということになる。

作者・白居易は、819年(元和十四年)、48歳。刺史の任として忠州に赴くことになった。

(元和十四年)春、離江州赴忠州刺史任(朱金城著、白居易年譜、101頁)(以下、白居易年譜、とする。以下、同じ。)

白居易にとって、刺史の任となったのは、更にその前の年のことであった。818年(元和十三年)、

十二月二十日、代李景儉為忠州刺史(白居易年譜、91頁)

(註)白居易年譜の記事の文は、文字は旧漢字であるが、それを新漢字に私意的に改めている場合がある。以下、同じ。

彼が、忠州に着任したのは、819年(元和十四年)3月、

二十八日抵忠州(白居易年譜、101頁)

と。それは、西暦819年3月28日のことであった。

この「除夜」の詩の意とするところは、次のようなものであろうか。

一年のうちの、この年の瀬の「歳暮」は、一年のことを振り返って、あれもこれもと思い出させることしきりである。ましてや故郷、鄭州新鄭県(河南省)、(白居易年譜、1頁)からは、遙かに遠く離れている。

この「天涯」であるが、①空のはて②極めて遠き地(大字典、513頁)

(「大字典」、上田万年、岡田正之、飯島忠夫、栄田猛猪、飯田伝一、編著、講談社刊、昭和38年初版)(漢和辞典は、専らこの「大字典」を用いている。以下、同じ。)

従って、私は、故郷から遙かに遠い地にあつて、「未帰」で、いつ故郷に帰ることが出来るのか、その検討すらたてられていない状態である。

○「老」いてとは、作者自身が年を重ねて、年とってしまつて、の意。この時代、何歳から「老」と言つたのであろうか。又、白居易の詩では、いつの年齢から「老」を用いているか。

○「新甲子」の「甲子」とは、日本でも用いている、十干十二支の組み合わせのこと。「大字典」、  
「十干と十二支と。漢書「天以甲子」(1508頁)。ここでは、新しい年、の意カ。

○「病」とは、作者自身のことをさして表現したもの。

○「舊容輝」とは、昔の若々しい容貌のこと。

従って、私自身年老いてしまつて、その上更に新しい年を迎えようとしている。私自身「病」がちで、従って、「昔の若々しい容貌」は、見る影もないくらいである。

○「郷国」とは、故郷の自分の国のこと。

○「仍」とは、音「ジヨウ、ニヨウ」。①「なほ」②「たびたび」③「しきりに」等の意がある。(大字典、82頁)

○「功名」とは、「功をたて、名をあぐること。戦国策、成功名干天下」(大字典、252頁)。

○「息機」とは、「俗世の機心を断つ。名利を求める心を捨て去る」(新釈漢文大系100、「白氏文集四」、182頁)

従って、我が故郷のことは、まだしきりと「念頭」から離れたことなく心に強くあり、しかし、「功名」心は、とおの昔に捨て去つてしまつている。

○「明朝四十九」とは、明日年が明けて、齢は「四十九」となる、そのことを表現したものである。

○「應」は、再読文字。

○「轉」は、「我国にてはウタタと訓じ、①移り進みて、甚だしくなりて、②いよいよ、ますます、「轉興多し。」③怪しく、善からずして、常ならずして等の義とす。」(大字典、2187頁)

(註)大字典の漢字の文字は、舊漢字であるが、それを説明書きのところの文字は、新漢字に私

意的に改めている場合がある。以下、同じ。

○「悟前非」は、「従來の過失を知る」(新釈漢文大系100、「白氏文集四」、182頁、参照)

従って、年の暮れもいよいよ今日で終わり。明日は新しい年の初めである。年齢(とし)も48歳は今日で終わり。新年の明日からは、49歳である。従って、いよいよ、ますます、過ぎ去った48年の過失を充分に悟らねばなるまい。

と、なろうか。従って、時間にすれば、僅かの日数であるが、しかし、年からすれば、二年のことを語っている。更には、過去を振り返っての、48年間の「前非」を悔い、「悟」るべし、と語っているのである。

この詩の次は、「聞雷」という詩である。

#### 聞雷

瘴地風霜早	温天氣候催
窮冬不見雪	正月已聞雷
震蟄蟲蛇出	驚枯艸木開
空餘客方寸	依舊似寒灰 (232~233頁)

(註) 漢詩の場合は、勿論字体は、舊漢字であるが、それを新漢字に私意的に改めている場合がある。以下、同じ。

この詩は、「春至」より一つ前の詩である。五言律詩であるので、韻は、「催」、「雷」、「開」、「灰」に押韻されている。

この「聞雷」の詩の意とするところは、次のようなものであろうか。

- 「瘴」は、「山川の悪気に触れて起る一種の熱病。」(大字典、1533頁)
- 「瘴地」は、「白居易のいる忠州を指す。」(新釈漢文大系100、「白氏文集四」、183頁)(註1)  
「忠州」の土地柄をこのように表現しているということは、余程の所、という感じを受ける。
- 「温天」は、「暖かな天空。」(註1、183頁)
- 「氣候」の「氣」は、「陰曆一年を二十四分せる一期節」(「大字典」、1272頁)。「氣候」の「候」は、「季節の義とす。支那の気象学は昔時氣の小変動を分つ為に五日を一期とし之を候といへり。」(大字典、129頁)。この場合の「氣候」は、そのことを指す。

従って、「瘴熱のこもるこ忠州」は、冬の寒さは殊の外であって、寒い風も、厳しい霜の状態も、それ相当のものがあつて、しかし、それらも以外と早くに通り返り過ぎていく。そして「暖かな天空」は、「季節」の移り変わりを敏感に捉えて、春の陽光を迎へ一面に表している。

○「窮」、「窮」は「手づまること。金銀に限らず困窮すること。」(大字典、1646頁)

従って、非常に厳しい冬でも「不見雪」で、雪を見ることはない。「正月」には、既に「聞雷」で、「雷」を聞くことになった。

○「蟄」、「蟄」は「蟲類の土中に潜伏すること。故に蟲をかく、」(大字典、1975頁)

従って、大変寒い冬、土の中に籠もっていた虫どもを驚かせて、虫も蛇も土の中から地面に這い上がらせ、又、冬枯れていた木々をも驚かせて、草も木も花をいっぱい咲かせている。

○「空」、「空」は「むぎむぎと」(註1、183頁)

○「餘」、「餘」は「食物の豊饒なること。故に食扁。転じて広くありあまる義又は残り・程を過ぐる等の義とす」(大字典、2468頁)

○「客方寸」、「客は旅人。異境にある白居易自らをいう。方寸は方寸大の心臓のこと。」(註1、183頁)

○「死灰」、「死灰」は「熱氣の失せた死灰」(註1、183頁)

従って、それに引き替え、異境の地にある、旅人である、私自身はどうかと言えば、「むぎむぎと」春の到来からは一人取り残されて、元のまゝの、あの凍てつく寒さの、「熱氣の失せた死灰」の如き状態であ

り、「春雷」の後の、あのさわやかな気持ちになるには、まだまだである。  
の意となろうか。

つまり、「春雷」の季節となり、虫どもは春の到来とばかりに、地中から外に飛び出して、その喜びをあらわにし、又、草木も冬枯れの様子から一変して、春の訪れを待つかの如く、一斉に花を咲かせている。それなのに、自分一人だけは、冬の状態から抜け出せずに、冬のままの状態で、いる。誠に寂しい限りであるよ。

そんな様子を語っている、詩の一編かと思われる。

次の「春至」の詩の1句目は、「若為南国春還至」としている。この「南国」と言う表現であるが、これは何に対して「南国」かである。それを解く鍵は、「除夜」の1つ前の詩にある。曰く、

答楊使君登樓見憶  
忠萬樓中南北望 南州煙水北州雲  
兩州何事偏相憶 各是籠禽作使君(和刻本・九、232頁)

このことについて、(註1)181頁に、この詩の「解題」で、次のように触れている。

曰く、この詩は、「万州刺史楊帰厚が四望樓に登って、遙かに忠州刺史白居易を偲んで寄せた詩に答えたものである。」と。そして、「語釈」のところで、1句目の「忠萬」のことについて、次のように説いている。

○忠萬、四川省の忠州と万州。それぞれ白居易と楊帰厚がその刺史であった。兩州は四川省東部を流れる長江沿いに南北相隣する。(181頁)

## (二)

この四川省の概略のごく一部ではあるが、それを知ることは、とても有益であると思われるので、この事について、少し述べてみたい。

曰く、

現在、省都は、「成都、Chengdu」。

位置は、「中国の西南部、揚子江の上流に位置している。」

面積は、「56万平方キロメートル」。

人口は、「中国最大で約1億」人。

四川省には、四川盆地がある。この「四川盆地は面積が20万平方キロある、中国の代表的な盆地。」

現在、「農業が発達していて、米、麦、綿、茶、油菜(中略)などいずれも全国一の生産量を誇る。」(註2)

これを、日本の面積と人口とで比較してみたら、どうなるか。

日本の面積は、「377,835」平方キロメートル。

人口は、「127,767,944人」。(註3)

である。比較すると、面積は、日本の1.5倍。人口は、日本の0.8倍である。四川省の規模の大きさがわかる、と思われる。更に、別の資料で、別の角度から少し当たってみた。

曰く、

四川省はもともと海であったが、いまから一億三千五百万年まえには、内陸の巨大な湖となり、恐竜たちの天国になっていた。ところが七千万年まえ、地球の地殻変動で中国では強烈な造山運動が起こり、この内陸大湖の周辺はおしつけられて隆起し、湖底もまた上昇して湖水はその出口を求め

た。湖の周囲の隆起した山脈のなかで、東にある巫山山脈がほかに比べて低かったので、湖水はここから東へ流れ出した。巨大な湖が水を吐き出すと、そこは平均海拔五〇〇メートルの四川盆地となった。

巫山山脈が上昇を続ける一方では、流れ出した水が巫山の岩をたえず削りとり、その速度が、巫山山脈の上昇する速度を上回ったので、三峡という峡谷をそこに造りあげていったのである。(註4)

曰ク、

長江——、またの名を揚子江という。(註4、134頁)

曰ク、

長江の全長六、三八〇キロ、地理上では一本の大河であるが、部分的な呼称はそのまま残し、中国の地図もそれを記載している。

その呼称を上流から順に並べるとトト河、通天河、金沙江、長江となっており、長江の呼称は四川省の宜賓から下流となっている。(註4、134頁)

曰ク、

平均海拔五〇〇メートルの成都平野を流れてきた岷(びん)江は、この宜賓(ぎひん)で合流し、呼称は金沙江から長江に交代する。(註4、140頁)

曰ク、

長江の呼称は四川省宜賓の岷江との合流点に始まり、河口までの二、八八二キロをいう。(註4、141頁)

曰ク、

地理上の長江中流は、宜賓から湖北省の宜昌までの一、〇三二キロである。(註4、141頁)

曰ク、

万県から流れは東へ弧を描くが、その間に奉節から二〇〇キロ余の三峡がある。瞿(く)塘峡、巫(ふ)峡、西陵峡の断崖絶壁の景観は、李白、杜甫、白楽天の詩とともに有名である。(註4、141頁)

(註)「万県」とあるのは、白居易の詩に出てくる「万州」のことである。それは、何によってわかるかといえば、一つは、「世界地図、世界大百科事典、平凡社刊、2005、1、25、初版」(註5、020頁)によってである。そこには、長江の流れに沿って、「重慶」から「宜昌」までのところに、「忠県」より下流で、しかも北の方角に「万州」の名前が明記されていることから、そのことがわかる。もう一つの地図も、参考となる。それは、「世界大地図館、小学館刊、1996、11、20、初版」(註6、040、中国中央部)である。この地図では、「忠県」は「忠県」と記され、「万州」は「万県」と記されている。なおこの(註6、040、中国中央部)の地図は、地図の中央部に「四川省」、「四川盆地」を事細かに記しているのも、大変便利である。

以上、中国の地図、地形等の説明は、一応これで終わることとする。

### (三)

1頁の「春至」の詩との関連で見ている、4頁の「答楊使君登樓見憶」の詩の表現に見られる、

「忠萬」、「南北」、「南州」、「北州」、「兩州」、

等の表現は、「万州刺史楊焄厚」と「忠州・南州刺史白居易」との交友関係を語っている「詩」であることが、解る。

そこで、「春至」の詩に再び戻る。この詩一首は、どんな作品か。

春至

若為南国春還至                      争向東樓日又長  
 白片落梅浮澗水                      黃梢新柳出城墻  
 閒拈蕉葉題詩詠                      悶取藤枝引酒嘗  
 樂事漸無身漸老                      從今始擬負風光(233頁)

(校異)五句目「閒」——註1では、「閑」。(註1、183頁参照)

この詩は、七言律詩ではあるが、一句目には韻はなく、「長」、「墻」、「嘗」、「光」に押韻がある。

- 「若為」、「争向」は、「文語の如何。どうしよう。どうしようもない。」(註1、184頁)
- 「南国」は、「忠州・南州刺史白居易」の居所。(既に上述してきたところを、参照)
- 「還」は、「循環の語気を含み、今年もやはり。」の意。(註1、184頁)
- 「又」は、「添加の語気を含み、今年も重ねて。」の意。(註1、184頁)

従って、ここ「南国」忠州に春の到来を告げること、なった。どうしようか、どうすることも出来ない。こゝ作者の住んでいる所の「東樓」に、再び春の季節が巡って来て、陽が長くなってきた。どうしようか、どうすることも出来ない。

- 「白片」は、「白い花びら。」(註7、68頁頭注)
- 「澗水」は、「谷間の流れ」(註7、69頁頭注)

「澗」は、「山と山と夾みし間の川即ち谷川。故に水と間を合す。間(カン)は又音符。」(字源の説明)(大字典、1383~1384頁)

- 「黃梢新柳」は、「黄緑色の新芽の出た柳の枝」(註7、69頁頭注)
- 「城墻」は、「都市のめぐりの築土(ついひじ)の垣。城壁。」(註7、69頁)

従って、梅の白い花びらが、いっぱい落ちて、それが絨毯を敷き詰めたように、谷間の流れに漂っている。誠に見事な光景である。又、一方では、黄緑色をした新しい柳の梢は、築土の垣からはみ出すようにして伸びて、春を満喫するかの如きである。

- 「閒」は、「スキマのこと。夜分閉ぢたるアヒダより月光のさし入りたる義にて、即ち月光の見ゆるはスキマのある為なり。後誤って月を日に書く。転じてヘダツ・ヘダタル・タガフ・ヒソカ・シヅカ・ヤスミ・ユルヤカ安シ等の義とす。」(字源の説明)(大字典、2339頁)
- 「拈」は、「指にてひねること。占は音符。」(字源の説明)(大字典、935頁)
- 「悶」は、「憂へもだゆること。故に心をかく。門は音符。」(字源の説明)(大字典、850頁)

従って、暇な時間にまかせて、芭蕉の葉をつまみ取って、そこに詩を書いて、書いた詩を詠じている。又、私の心は、憂えることが甚だしく、そこで、藤の枝を折り取って、それを「ストロー式に酒甕に挿入して」(註1、184頁)、酒を吸いながら飲んだりしている。

- 「樂事」の「樂」は、「本義は樂器也。中間の白は鼓、両側の么は鞀、木は其台を示す。是より五声八音の総称となり、音楽を聞くはタノシキより樂(ラク)の意、又は好む意に転用す。我国にてはタノシキ義より転じラクといひて①心身の安らかなること。②簡単容易なること。③樂燒の略。④千秋樂の略。⑤死ぬこと等の義とす。」(字源の説明)(1198~1199頁)
- 「老」は、「人と毛と匕の合字にて七十歳以上の年寄のこと。匕は人を倒にせし貌にて年寄りて腰曲り髪白くなり全く其形を変ふる義、故に老は年おいて毛の化りし人といふ義なり、転じて老人の尊称、又、公卿・家臣等の長の義とす。」(字源の説明)(大字典、1782~1783頁)  
 又、曰ク、「老は年の寄ること。曲禮に三十曰壯、四十曰強、五十曰艾、六十曰耆、七十曰老、八十九曰耄、百年曰期、とあり。」(同訓意義の説明)(大字典、1783頁)
- 「負」は、「人と貝の合字。人が貝(財宝)を守り、心強く恃み居る義。一説財を借りて償はず初心に背く義なりともいふ。」(字源の説明)(大字典、2113頁)  
 又、曰ク、「ソムク義。負は広韻に背恩忘徳曰負と注す、」(同訓意義の説明)(大字典、「叛」ノ

トコロ、326頁)

従って、「樂」しいことは、段々と無くなってゆき、「身」はようやく「老」を迎えることゝなった。これからは、ようやく初めて、春の陽光・風光にそむいて、「余生を送ろう」(注1、184頁)、と思ひこむようになった。

の意となろうか。

よって、これらの白居易の詩と、慈円と定家の句題和歌との状況について、再び考えていくことゝする。

#### (四)

白居易の「春至」の一句、

「白片落梅浮澗水」

(校異)「澗」を、「澗」(註8、「拾玉集、1909」)

を句題として、慈円は、次のような和歌を詠んだのである。

雪をくゝる谷の小川に春そかし垣ねの梅のちりける物を(2015)

(校異)「谷の小川に」は、「谷のを川は」(註8、1909)

○「くくる」は、《クキ(漏)と同根か。奈良・平安時代はククリと清音。室町時代にはクグリ。

密かにあるものすきまをぬって移行する意》(語源等の概括的な説明)(註9、393頁)

○「Cuguri, u, utta.クグリ、ル、ツタ(潜り、る、つた)身を低くして、狭くて小さな所を通。

\* Mizzu iuano xitauo cuguru. (水岩の下を潜る)水が岩の下を通して流れる。\* Funega namiuo cuguru. (船が波を潜る)かぶさって来る大波のために、船が水の下をくぐるようにして来る。」(註10、163頁)

○この歌は、三句切れ。

従って、厳しい冬の間、降り積もっていた雪、その冬の綻びも解けて、谷の小川には、春を迎えたようである。こゝ私の住んでいる家屋敷の垣根の所では、梅がもうちらほらと、散り始めたことよ。

の意となろうか。

慈円の歌を見ると、作者の視点が二つあるように思われる。一つは、遠いところ。一つは、近いところ。視点を遠い所におくと、谷の小川の音が聞こえてくる。その「小川の音」は、雪解けの音が混じり合って、私の耳にも伝わってくる。一方、庭の垣根の辺りの梅は、もう満開を過ぎて、ちらほらと、散り始めていることよ。

こんなふうに、筆者はこの歌を捉えた。

(註11)では、この歌に該当するところで、種々の歌を引き合いに出して述べているが、その中から二、三取り上げて見ることゝする。

○「聴覚で春の到来を捉えた和泉式部の「春霞立つつや遅きと山川のいはまをくぐる音聞こゆなり」(後拾遺・春上・13)」(註11、26頁)

○「雪積もる峰に春日や射しつらむ谷のを川の水まさりゆく」(六百番・26・経家・春水)(註11、26頁)

○「春ぞかし今年おろかに過ぎしきて花におどろく白川の里」(拾玉・4023)(註11、26頁)

○「山里の垣根の梅は咲きにけりかばかりこそは春も匂はめ」(千載・冬・468・明快)(註11、26頁)

○「垣根の梅」は山里の垣根の梅花をいうもので、句題中の「澗水」から派生的に連想された語

であろう。」(註11、26～27頁)

○「物を——当該歌では詠嘆を表す終助詞と解した。」(註11、27頁)

(五)

次に、定家の歌を見ていくこととする。

白妙の梅さく山の谷風や雪げにきえぬせゞのしがらみ(66頁)

○しろたへ【白楮・白妙】楮(たへ)で織った白い布。(註9、675頁)

○しろたへの【白楮の】[枕詞]白楮の材料である藤と同音をもつ地名「藤江」に、白楮でつくる木綿(ゆふ)と同音から「夕」にかかる。また、白いところから「雲」「波」「幣(みてぐら)」「富士」「羽」などにかかる。(註9、675頁)

○「谷風の」「谷風は」「谷風に」「谷風や」に関しては、西行の歌、慈円の歌、定家の歌から、その用例を引くと、次のようになる。

○谷風の花の波をし吹きこせばみせきにたてる嶺の村まつ(註8、西行法師家集、602頁)

○谷風は戸を吹きあけて入るものをなにと嵐のまどたたくらん(註8、西行法師家集、610頁)

○谷風はとをふきあけているものをなにとあらしのまどたたくらん(註8、山家集、592頁)

○ 春水、持、故殿下

春くれば水をはらふ谷風のおとにぞつづく山川の水(註8、拾玉集、677頁)

○谷風に庭のくちばをはらわせて玉しく物はあられなりけり(註8、拾玉集、699頁)

○吉の山霞吹きこす谷風のちらぬ桜の色さそふらむ(註8、拾遺愚草、793頁)

○谷かぜのふきあげにさける梅の花天つ空なる雲やにははん(註8、拾遺愚草、798頁)

○白妙の梅さく山の谷風や雪げにきえぬせゞのしがらみ(註8、拾遺愚草員外、835頁)

○せぜ【瀬瀬】①あの瀬この瀬。多くの瀬。(註9、719頁)

○しがら・み【柵み】[名]①流れる水を塞(せ)くため、杭を打ち渡して竹や木の枝を横にからませたもの。(註9、597頁)

○Xigarami. シガラミ(柵) 川の水を止めたり、土地が崩れないように支えたりするために作る、堰堤に似た杭の列。(註10、764頁)

○ゆきげ【雪消】雪が消えること。雪どけ。(註9、1327頁)

○三句切れの歌カ。

従って、その解は、

白妙の如く、真っ白な花をこゝかしこで咲かせている梅、その梅の花は、山で咲いているのであるが、山から吹き下ろす風、それによって谷間の風は、一層激しさをましていることよ。その谷間を流れている川、そこでの瀬々の柵の雪は、本来なら雪どけによって消えて良いはずが、まだ消えずに残っている。それは、きっと山から吹き下ろしている、風によって運ばれてきた梅の花びらなのであろうかなあ。と、なろうか。

ここで問題なのは、「谷風や」であるが、「谷風」は、「谷かぜのふきあげにさける梅の花」(拾遺愚草、798頁)の例歌の如く、一つの解は、「谷」から「ふきあげ」る「風」をさすものと思われる。ところが、この歌「白妙の梅」云々の歌は、そうではあるまい。筆者は、上述の解の如き、見解をとった。後考を俟つこととする。

定家の歌の場合、視点は、「谷風」と、「谷」間を流れる川と、「せゞのしがらみ」だと思われる。

以上、白居易の句、「白片落梅浮澗水」を題として、慈円の詠んだ歌、並びに、定家の詠んだ歌、につ



いての、種々の考察は、これで一区切りとすることとする。

種々考察してきた中で、白居易のことで述べておきたいことがある。それは、「老」の問題である。

「老」の問題は、古今東西、人だれしものが、一度は、考えている問題の一つだと思われる。

白居易の場合、それが、いつ顕在化したかである。少なくとも、白居易48歳から49歳のところで、既に作品の上に、それが、見られるのである。そのことを、一つ、指摘しておきたいのである。そして、筆者としても、白居易のこの問題については、機会あるごとに、考察を進めていきたいと考えている。

### (註)

- (註) 1) 新釈漢文大系100、「白氏文集四」
- (註) 2) 中国情報満載のオンライン百科事典、中国まるごと百科事典。  
www//allchinainfo.com/profile/city/sichuan.html
- (註) 3) フリー百科事典『ウィキペディア (wikipedia)』  
//ja.wikipedia.org/  
(註) 平成19年10月15日調べ。この「ウィキペディア」では、内閣総理大臣(首相)を「福田康夫」としているの、最新のものである。
- (註) 4) 世界の国シリーズ 16 中国、講談社、1981年11月、初版  
①—長江、の執筆担当者は、シナリオライター長野広生氏。(134～149頁) ココハ、142頁。
- (註) 5) 世界地図、世界大百科事典、平凡社刊、2005、1、25、初版
- (註) 6) 世界大地図館、小学館刊、1996、11、20、初版
- (註) 7) 和漢朗詠集(校注者、川口久雄、岩波書店刊、日本古典文学大系73)
- (註) 8) 新編国歌大観、第三卷、私家集編I
- (註) 9) 岩波・古語辞典、大野晋、佐竹昭広、前田金五郎、編。
- (註) 10) 邦訳・日葡辞書、土井忠生、森田武、長南実、編訳。
- (註) 11) 文集百首全釈、略して(便宜的に)、文集全釈。

テキストは、以下の通りである。

- 1、「白氏文集」は、  
「和刻本・漢詩集成・唐詩」(第九輯・第十輯、2冊揃)長沢規矩也編著、汲古書院刊、昭和49年11月初版
- 2、慈円の「百首句題和歌」、並びに慈円の和歌等については、國學院大學図書館蔵、武田祐吉博士旧蔵本、「六家集、拾玉(一・二・三・四・五・六・七)、慈鎮和尚、」(911. 147-6-(3)、911. 147-6-(4)、911. 147-6-(5)、911. 147-6-(6)、911. 147-6-(7)) (七巻本) (和本)
- 3、定家の「百首句題和歌」、並びに定家の和歌等については、「訳注、藤原定家全歌集」(上、下)、(2冊揃)、久保田淳著、河出書房新社、昭和61年6月刊
- 4、「白氏文集」の解釈本については、  
「白氏文集」(一・二・三・四・五・六・七・八・九・十・十一・十二・十三)  
新釈漢文大系、岡村繁編著、明治書院刊。このうち、現在刊行されているのは、(二上・二下・三・四・五・六・八・九) (2007年10月現在)
- 5、その他、参考文献については、随時記していくこととする。
  - 1) 新編国歌大観、第三卷、私家集編I、角川書店刊、昭和60年5月初版
  - 2) 新編国歌大観、第四卷、私家集編II・定数歌編、角川書店刊、昭和61年5月初版
  - 3) 慈円全集、多賀宗華編著、七丈書院刊、昭和20年1月
  - 4) 校本拾玉集、多賀宗華編著、吉川弘文館刊、昭和46年3月
  - 5) 慈円の研究、多賀宗華著、吉川弘文館刊、昭和55年2月
  - 6) 慈円(人物叢書)、多賀宗華著、吉川弘文館刊、昭和34年1月初版
  - 7) 慈鎮和尚乃研究、間中富士子著、森北書店刊、昭和18年
  - 8) 慈円・国家と歴史及文学、筑土鈴寛著、三省堂刊、昭和17年10月
  - 9) 新古今歌人の研究、久保田淳著、東京大学出版会刊、昭和48年3月

- 10) 中世和歌史の研究、久保田淳著、明治書院刊、平成5年6月
- 11) 慈円和歌論考、石川一著、笠間書院刊、平成10年2月
- 12) 慈円の和歌と思想、山本一著、和泉書院刊、平成11年1月
- 13) 鎌倉仏教の研究、赤松俊秀著、平楽寺書店刊、昭和32年8月初版
- 14) 愚管抄(校注者、岡見正雄、赤松俊秀、岩波書店刊、日本古典文学大系86)昭和42年初版
- 15) 愚管抄全註解、中島悦次著、有精堂刊、昭和44年7月
- 16) 愚管抄を読む、大隅和雄著、平凡社刊、昭和61年5月
- 17) 愚管抄の創成と方法、尾崎勇著、汲古書院刊、平成16年4月
- 18) 新古今集歌人論、安田章生著、桜楓社刊、昭和35年3月初版
- 19) 古今和歌集(校注者、小島憲之、新井榮藏、新日本古典文学大系5)1989年初版  
後撰和歌集(校注者、片桐洋一、新日本古典文学大系6)1990年初版  
拾遺和歌集(校注者、小町谷照彦、新日本古典文学大系7)1990年初版  
後拾遺和歌集(校注者、久保田淳、平田喜信、新日本古典文学大系8)1994年初版  
金葉和歌集(校注者、川村見生、柏木由夫、新日本古典文学大系9)1989年初版  
詞花和歌集(校注者、工藤重矩、新日本古典文学大系9)1989年初版  
千載和歌集(校注者、片野達郎、松野陽一、新日本古典文学大系10)1993年初版  
新古今和歌集(校注者、田中裕、赤瀬信吾、新日本古典文学大系11)1992年初版  
以上、出版社、岩波書店刊  
八代集総索引(久保田淳 監修、新日本古典文学大系 別巻)岩波書店刊、平成7年初版
- 20) 八代集抄、山岸徳平編著、有精堂刊、昭和35年7月初版(3冊揃)
- 21) 和漢朗詠集(校注者、川口久雄、岩波書店刊、日本古典文学大系73)昭和40年初版
- 22) 藤原定家「文集百首」の比較文学的研究、鴛雪艶著、汲古書院、平成14年2月
- 23) 玉葉、国書刊行会編刊、明治39年2月(3冊揃)
- 24) 明月記、国書刊行会編刊、明治44年9月(3冊揃)
- 25) 玉葉索引、多賀宗集編著、吉川弘文館刊、昭和49年3月
- 26) 新訂 明月記人名索引、今川文雄著、河出書房新社刊、昭和60年3月
- 27) 訓読 明月記、今川文雄著、河出書房新社刊、昭和52年9月(6冊揃)
- 28) カラー図説、日本大歳時記、水原秋櫻子、加藤楸郎、山本健吉、監修 講談社刊、昭和56年12月(5冊揃)
- 29) 大日本史料、第三編(全27冊、内21冊までは手元にあり)、第四編(全17冊(1冊は補遺編)、いずれも手元にあり)、第五編(全33冊、内27冊までは手元にあり)、東京大学史料編纂所編、東京大学出版会、復刻版、昭和43年~61年
- 30) 歌論集、(校注者、久松潜一、岩波書店刊、日本古典文学大系65)、昭和36年9月初版
- 31) 源家長日記全註解、石田吉貞、佐津川修二著、有精堂刊、昭和43年10月
- 32) 日本文法講座(全6巻)、続日本文法講座(全4巻)、明治書院刊、昭和34年
- 33) 校註 国歌大系(全28巻)、講談社刊、昭和51年復刻版
- 34) 新古今和歌集全評釈(全9巻)、久保田淳著、講談社刊、昭和51年~52年
- 35) 谷山茂著作集(全6巻)、谷山茂著、角川書店刊、昭和57年~59年
- 36) 日本佛教史(全10巻)、辻善之助著、岩波書店刊、昭和19年~30年初版
- 37) 源信(日本思想大系6)、校注者 石田瑞磨、岩波書店刊、1970年初版
- 38) 往生傳 法華驗記(日本思想大系7)、校注者 井上光貞、大曾根章介、岩波書店刊、1974年初版
- 39) 天台宗全書(全25巻)、天台宗典刊行会、第一書房復刊、昭和49年~50年
- 40) 吾妻鏡(8冊揃)、日本古典全集、日本古典全集刊行会編、与謝野寛、正宗敦夫、与謝野晶子、編纂校訂、大正15年初版(自治承四年、至文永三年)
- 41) 吾妻鏡(5冊揃)、龍肅訳注、岩波文庫、1939年~1944年初版(治承四年~暦仁元年)
- 42) 史料総覧(全17巻、内巻一・二・三・四、の4巻は、手元にあり。因みに巻三は、保安四年(1123年)より文治元年(1185年)まで、巻四は、文治元年(1185年)より建長七年(1255年)まで)、東京大学史料編纂所編、東京大学出版会、復刻版、昭和56年
- 43) 定家明月記私抄、定家明月記私抄続篇(2冊揃)、堀田善衛著、新潮社刊、1986年、1988年
- 44) 白讀歌、在九州国文資料影印叢書(第三期)5、福井迪子編、在九州国文資料影印叢書刊行会刊、昭和56年5月
- 45) 新編国歌大観、第一巻、勅撰集編、角川書店刊、昭和58年2月初版
- 46) 新編国歌大観、第二巻、私撰集編、角川書店刊、昭和59年3月初版
- 47) 新編国歌大観、第五巻、歌合編等、角川書店刊、昭和62年4月初版
- 48) 新編国歌大観、第六巻、私撰集編Ⅱ、角川書店、昭和63年4月初版
- 49) 新編国歌大観、第七編、私家集編Ⅲ、角川書店、平成元年4月初版
- 50) 新編国歌大観、第八編、私家集編Ⅳ、角川書店、平成二年4月初版

- 51) 新編国歌大観、第九編、私家集編Ⅴ、角川書店、平成三年4月初版
- 52) 新編国歌大観、第十編、定数歌編Ⅱ等、角川書店、平成四年4月初版
- 53) 私家集大成、第1巻(中古Ⅰ)、第2巻(中古Ⅱ)、第3巻(中世Ⅰ)、第4巻(中世Ⅱ)、第5巻(中世Ⅲ)、第6巻(中世Ⅳ)、第7巻(中世Ⅴ)、和歌史研究会編、明治書院、昭和48年11月～51年12月刊
- 54) 保元物語、平治物語、承久記、(校注者、栃木孝推、日下力、益田宗、久保田淳、岩波書店刊、新日本古典文学大系43)、1992年7月刊
- 55) 中世和歌集 鎌倉篇(校注者、樋口芳麻呂、糸賀きみ江、片山享、近藤淳一、久保田淳、佐藤恒雄、川平ひとし、岩波書店、新日本古典文学大系46)、1991年9月刊
- 56) 中世和歌集 室町篇(校注者、伊藤敬、荒木尚、稲田利徳、林達也、岩波書店、新日本古典文学大系47)、1990年6月刊
- 57) 定家十體、「日本歌学大系」第四巻、佐々木信綱編、風間書房、昭和31年刊)
- 58) 藤原定家研究、佐藤恒雄著、風間書房、2001年5月刊
- 59) 愚管抄の「ウソ」と「マコト」、深沢徹著、森話社、2006年11月刊
- 60) 文集百首全釈(歌合・定数歌全釈叢書Ⅷ)、文集百首研究会著、風間書房、2007年2月刊
- 61) 玉葉、今川文雄校訂、思文閣出版、昭和59年初版、平成4年11月再版
- 62) 白氏文集を読む、下平雅弘著、勉誠社、平成8年10月刊
- 63) 白楽天の愉悅—生きる叡智の輝き、下平雅弘著、勉誠出版、2006年4月刊
- 64) 白居易「風諭詩」の研究、静永健著、勉誠出版、平成12年2月刊
- 65) 白居易研究講座第一巻、白居易の文学と人生Ⅰ、編集 太田次男、他10名、勉誠社、平成5年6月刊
- 66) 白居易研究講座第二巻、白居易の文学と人生Ⅱ、編集 太田次男、他10名、勉誠社、平成5年7月刊
- 67) 白居易研究講座第三巻、日本における受容(韻文篇)、編集 太田次男、他10名、勉誠社、平成5年10月刊
- 68) 仏教文学講座第一巻、仏教文学の原点、編集 伊藤博之、今成元昭、山田昭全、勉誠社、平成6年7月刊
- 69) 仏教文学講座第四巻、和歌・連歌・俳諧、編集 伊藤博之、今成元昭、山田昭全、勉誠社、平成7年9月刊
- 70) 拾玉集本文整理稿、石川一著、勉誠出版、平成11年2月刊
- 71) 和歌文学講座第六巻、新古今集、編集 石吉保、他5名、勉誠社、平成6年1月刊
- 72) 藤原俊成全歌集、松野陽一、吉田薫、編、笠間書院、2007年1月刊
- 73) 西行全集、久保田淳編、日本古典文学会、貴重本刊行会、昭和57年5月刊
- 74) 藤原家隆集とその研究、久保田淳編著、三弥井書店、昭和43年7月刊
- 75) 校本秋篠月清集とその研究、片山享著、笠間書院、昭和51年6月刊
- 76) 藤原良経全歌集とその研究、青木賢豪著、笠間書院、昭和51年8月刊
- 77) 「文集百首」における慈円の「白氏文集」の受容態度、田中幹子氏、いづみ通信NO.35(和泉書院)(2007、5) 5～7頁
- 78) 白居易研究—閑適の詩想、埋田重夫著、汲古書院、2006年10月刊
- 79) 慈円年譜、筑土鈴寛著、筑土鈴寛著、慈円・国家と歴史及文学、所収(昭和17年)
- 80) 慈円詠歌年譜、石川一著  
上)学園女子短期大学紀要第11号所収(昭和56年)
- 81) 定家年譜、久保田淳著  
久保田淳著、訳注藤原定家全歌集下巻、所収(昭和16年初版)
- 82) 白居易年譜、朱金城著  
朱金城著、白居易年譜、上海古籍出版社(1982年6月第1版)(全335頁)
- 83) 白居易略年譜、下平雅弘著  
下平雅弘著、白氏文集を読む、所収(平成8年)
- 84) 白居易の官歴表、布目潮瀧著、白居易研究講座第一巻、「白居易の官人としての経歴」所収
- 85) 白居易研究講座第四巻、日本における受容(散文篇)、編集 太田次男、他10名、勉誠社、平成6年5月刊
- 86) 白居易研究講座第五巻、白詩受容を繞る諸問題、編集 太田次男、他10名、勉誠社、平成6年9月刊
- 87) 白居易研究講座第六巻、白氏文集の本文、編集 太田次男、他10名、勉誠社、平成7年12月刊
- 88) 白居易研究講座第七巻、日本における白居易の研究、編集 太田次男、他10名、勉誠社、平成10年8月刊
- 89) 法華経、坂本幸男、岩本裕、訳注、岩波書店刊、1991年6月(3冊揃)